



# 万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口3-8-3  
帝京大学医学部附属溝口病院外科  
TEL: 044-844-3333(内線3223) FAX: 044-844-3222  
発行者：山川達郎  
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大総合医療センター外科）  
E-mail: 03nmura@saitama-med.ac.jp  
印刷：株式会社dig TEL: 03-3551-3060  
年2回発行1995年4月創刊

**第39回**  
**World Congress of Surgery/  
International Surgical Week**  
**2001に出席して**  
**National Delegate of Japan, ISS/SIC**

**万国外科学会  
日本支部長  
山川 達郎**  
(帝京大学医学部名誉教授、帝京大学溝口病院外科客員教授)



## ISS/SIC発祥の地・ブラッセル

今回の第39回World Congress of Surgery/ International Surgical Week 2001は、本会創設100周年を記念して、その発祥の地、ベルギーの首都ブラッセル市のCity Convention Center（写真1）で開催されました。ブラッセル市は、ECやNATOなどの国際的な諸機関がオフィスを構える国際都市ですが、その反面、他の管理下にあった時代の遺産である世界でもっとも中世の香り漂う美しい広場といわれるGrand Place（写真2）に見られるゴシック建築（写真3：市庁舎）や町のそこそこにみるバロック建築の街並みは、新しいものと美しく見事に調和していました。学会会場は、Grand Placeから程近い市の中にあり、有名な小便小僧や14世紀から現代までの巨匠の絵画を所蔵する王立美術館や王宮なども歩いていける距離にありましたので、学会の合間に簡単に楽しむことができました。また近郊には、フランダースの犬で有名なノートルダム大聖堂があるアントワープや北のベニスにたとえられる運河の景色が美しいブリュージュなどたくさんの見所もありましたから、多くの会員の先生は今回の旅行を十分に楽しまれたのではないかと思います。

## 第39回World Congress of Surgery/ International Surgical Week 2001

今回の学会は、会場数が多すぎて各会場が閑散としていたという前回のウィーンでの本会の反省から、会場数は9会場に限定され、シンポジアムなど教育的なプログラムが数多く編成され、また一般講演やポスターセッションも二人の司会者をたてて時間をとって討議していました。また前回の会が、経済的に問題を残したこと也有って、夜のレセプションを縮小あるいは廃止したことも今回の会議の特徴でした。後者に関しては、いろいろな意見があろうかと思いますが、自由時間があってよかったですという意見も多分、多かったのではないかと思われます。これに関しては次回International Committee Meetingで聞いてみたいと思っています。

一方、学会会場ではことさら日本人の活躍が目立ち、日本人が完全にISS/SICの中で主要な地位を確実なものとしていることを実感できた学会でもありました。慶應大学 北島正樹教授が今回のGray Turner Lecturerに選ばれ、大変立派に、その大賞を果たされました。内容が学問的にすばらしかったことは言うまでもありませんが、気品のあるエレガントな講演マナーはさすがで、聴衆を完全に魅了するものがありました。高い評価が得られたものと確信しています。また100周年を記念しての本学会では、本会の発展に寄与された歴史的人物の功績が公表されました。当時ドイツの

Breslau大学に留学中の故三宅 速九州大学医学部名誉教授が第7回ローマ大会に初代SIC日本代表として出席されている事実や氏が第1次大戦でcountry memberを剥奪されたドイツ、オーストリアの第8回本会時の再加入に、12名の当時の日本会員と37名の世界の親独家pro-



(写真1)

german達のサインを集めて奔走されたといったエピソードが比企教授から公開され、日本とISS/SICとの浅からぬ関係を改めて痛感しました。一方、各会場にも数多くの日本人会員の参加が認められ、討論に積極的に参加している若い会員も何人かお見かけして頗もしくを感じました。このような大きな国際学会こそ、国際性を学ぶまたとない機会であると同時に、日本の医療レベルを世界に発信する絶好な機会でありますから、若い会員にはこれからもこの会に積極的に参加していただきたいと思っています。

## ISS/SIC International Committeeからの報告

今回のISS/SIC International Committeeは、学会前日の8月26日に開催されました。会員数は256名で、米国に次いで2番目の会員数を誇りますが、他の国が会員数が減少傾向にある中で増加していることは大変評価されました。役員の交代は今までの会長Professor S.A.Wells Jr. (USA)に代わって、Sir P. Morris (UK)が会長に就任、2003年のCongress PresidentにProfessor J.R. Siewert (Germany)に選出され、それにより空席になったSecretary Generalには、Professor F. Harder (Switzerland)が選出されました。また長年General Treasurerとして本会の発展に貢献された日本でもお馴染みのProfessor L. M. Nyhusが引退され、その後任に Professor E. Lezoche (Italy)が就任しました。Councilorでは、Professor R. Nambier (Singapore)が引退され、新たにProfessor H. Obertop (Netherlands)と Professor K. Sandelin (Sweden)が選出されました。



(写真2)

## 日本がInternational Surgical Weekを主催できる日はいつの日か。

1999年ウィーンでのCongress時、2007年の主催国に米国が立候補していく順番からしても米国に決定される可能性が強いという考え方から日本は立候補せず、2009年を目指すことを、前回のInternational Committeeでも口頭で表明いたしました。しかしその時の選挙の結果はAdelaide(Australia)に決定されたことは周知のことだと思います。その後、Adelaideは2009年の主催国にまわることになったと言う情報を得たわけですが、これは選挙結果は参考資料であって、候補地の最終決定権はExecutive Committeeにあるという内規から、Adelaideは米国にその権利を譲渡することになったのではと理解していました。それにしても前回の選挙は2007年の主催国を決定するための選挙であり、2009年の主催国を決める選挙ではなかったと理解していることを理由に、今回も私どもは、2009年に立候補することを表明するつもりで説明を準備していたのですが、今回の会議では、2003年のThailand Congressと2005年のDarban Congressの準備状況報告に続き、2007年、2009年の主催国に関しては、既定の事実として報告されたにすぎませんでした。会員の諸先生方には期待を裏切るようなこととなってしまいまして誠に残念に思っている次第です。しかしInternational Committeeに配布された報告書では、2009年の主催国はAdelaideと記載されておりましたが、2007年の候補地は、North/South America or Caribbeanと記されているだけで、具体的な主催国の記載はありませんでした。ある人からの情報では、Montorior(Canada)が候補になっているようですが、未解決の問題があつて決定できずにいるようです。Newsletter July/2001にNew Criteria to Host ISW

が掲載されましたが、これは2007年の選挙結果をくつがえしたもの、いまだに混乱している現状を打破するためのExecutive Committeeの苦肉の内規の変更ではなかったかと考えられます。またその中でa)Europe, Middle East and Africa ,b) North-, Central- and South America, c)Asia and Pacific Basin の4つの区域に分け、理想的には定期的に順番に4つの区域からHost Countryを決めるが、必ずしも順序は問わないという条文が付記されました。また日本支部の意見で、National Chapter のsizeも大切であるが、活動状況も評価すべきという意見が採用され、条文に付記されることが総会でも決定いたしました。一応は2003年、2005年の主催国は決定していますが、Darbanには最近、銃などが不法に流れ込んでいるという物騒なニュースがありますし、また今回の米国での同時多発テロを契機として、情勢はどのように変化していくものなのか流動的です。日本は今そのままなら2011年あるいはそれ以降ということになるかもしれません、日本はいつ何時でも要請があれば主催国となることを引き受ける準備があることを表明しておりますので、まだまだ主催国に指名される可能性があると考えています。

### ISS/SIC・Japan Chapterからの報告

今までISS/SIC学会費は学会本部へ、日本支部会費は日本支部事務局へ送っていただいておりましたが、米国にならい日本支部会費も合わせ学会本部に送付していただき、日本支部会費は、学会年会費を差し引いて日本支部に返金いただく方法に昨年から変更させていただき、それにより個人負担金を少なくすることができます。今回も本部よりUS\$8,720が会費未納入者のリストとともに、返金されてまいりました。会費未納入者のリストをみてみると、その中には当然、Senior Memberになってしかるべき

先生方が大勢おられることがわかりました。この際、会費納入者数は一時的には減少しますが、資格ある先生には若い方を紹介していただくことを条件にどしどしSenior Memberにご推薦申し上げたいと考えています。会員数はSenior Memberと会費納入者の合計数で表示されますので、一時的に会員数は減ることは仕方のないことなのかも知れません。米国の会員数が減少したのもその辺に理由があったと聞いています。会員数を増やし、積極的に活動を続けていけば、意外にも早い時期に、本会を主催することができるかもしれません。ISS/SIC日本支部会は、これからも会員諸先生方の意見を代弁して、ISS/SIC内の地位を高めていきたいと考えています。先生方のご協力を心よりお願いしてやみません。



(写真3)

## 理事挨拶

### 2001年度 ISS/SIC理事会に出席して 万国外科学会理事 比企 能樹 (北里大学名誉教授)

100年という流れは、さながら大河のように泰然としている。以来1世紀を経て、万国外科学会は当学会生誕の地である、古式燐然しかもEU本部のあるヨーロッパ新生都市ブリュッセルで、ISW2001が8月25日より切って落とされた。日本からの学会で発表する参加者の数は、名簿上で294名、またその教室の同行者や同伴者を数えると実に500名をはるかに越えて、600名に迫る日本の人々がブリュッセルに集合した。

学術プログラムは、今回は特に100年記念であるせいか応募が多く、近年にない厳しい採択であった。因みに査読点数の平均が6.0未満は不採用となり、採択率はオーバーオールで60%である。日本からの発表は、前回のウイーン大会において語学力が問題となり、あるセッションでは座長から「通訳をつけるべきだ」と提案されたほどであった。だが今回は、全般に全ての発表がスムースに行われ、前回のような批判を耳にしなかったのは、厳しい審査で発表者の水準が上がったということであろうか。特に、若い研究者の発表を聞くにつけ、その国際感覚の発露には驚くべき進歩がみられたことは事実である。

さて、前日行われた理事会の報告として、一つは前回のウイーン大会は諸物価の高騰により赤字決算を産んだために学会運営上に大きな問題を残し、同時に世界的な不況が加わって、今後の議論点となることは間違いない。また更なる当学会の発展のためにも、何とか経済状態が上向いてくれないと、医学の探求により影響は出ないのでなかろうかと、如何ともし難い世界情勢を、理事一同で気を揉んだ。



開催地の決定方法については、既に1995年の理事会より検討が始まり、総会の投票を参考として理事会が行おうということになった。これを踏まえて、先々回より理事会の上部組織に会長・前会長・次期会長・事務総長・事務局長などによるStrategy Committeeが発足し、同時にガイドラインの見なおしがなされ（本学会NEWSLETTER July 2000に掲載）(a) Europe, Middle East and Africa (b) North-Central and South America (c) Asia and Pacific Basinという開催地域を相互に周ることが明示され、更に前回の投票結果を考慮に入れて今回は投票を行わないとの報告があった。その結果、2007年(b)のアメリカ大陸での開催を決定し、2009年はウイーン総会の投票第一位のオーストラリア(c)が最有力と見なされた。

なお今回の理事会では開催国的能力の評価が論議され、その点で日本は会員数、発表内容並びに件数も群を抜き力があり、ガイドラインによるといずれの点でも開催能力を満たしているとの評価を得た。しかしながら、世界的な経済不況からより安価な場所での開催を希望する声が大きく、今後の日本開催については物価高が論点となる。なお社会情勢の急激な時代変動を鑑み、わが国は何時如何なる場合も受け立てる用意があることを、強く表明した。

次に会員にとって明るい兆しとしては、本学会の公式機関誌であるWorld Journal of Surgeryの評価が上昇しつつあることである。1999年のJournal Citation Reportsによれば、Impact Factorが2.025と上昇した現在、外科専門誌としてはANN SURG, BRIT J SURG, そして SURGERYに次いで、4番目にランクされるようになった。わが国は旧く第7回ローマ大会以来、当学会には深く関わってきた歴史もあり、ここで若手の研究者諸氏は、より積極的に投稿し参加して頂きたいものである。



## 特別寄稿

## 国際学会と私

新潟大学医学部保健学科教授

鈴木 力



先般、8月27日から30日の期間、ベルギーのブリュッセルで2001年国際外科週間と銘うつて第39回万国外科学会世界大会が開催された。聞き及ぶところによると、本邦からの発表者は約300人ということで、各國中で最多とのである。日本外科学会の重鎮の先生方は勿論のこと、若い新進気鋭の先生方の発表者も多く見受けられた。私の印象であるが、国際医学会への日本からの参加は近年とみに増加しているように思われる。私が初めて海外の国際学会に参加したのは、丁度10年前、1991年8月にスウェーデンのストックホルムで開催された第12回CICD世界大会であるが、当時はどちらかというと大学医局の教授の先生方を中心に、中高年者の参加がおもで、若い先生方の参加は少数であった。当時と比較して、円高などにより海外渡航が容易になったこともあるが、何よりもわが国の若手研究者の外科学研究の先端性、独自性とともに、国際的な場で研究発表を行おうという、積極的な姿勢を反映するものとして喜ばしい限りである。

さて、海外での国際学会に参加する際には、それぞれの国の歴史や文化など、国内では体験できないことを実感できることが大きな楽しみである。いわゆる名所・旧跡巡りや、芸術鑑賞、地元料理など、各人各様に学会の合間にみて楽しめていることと思う。私はといえば、この数年、特にヨーロッパを訪れる際には都市郊外の田園地帯を気ままにドライブすることが大きな楽しみとなっている。中学高校生の頃にテレビなどで見たヨーロッパの丘陵地帯の景観は私にとって非常に印象深く、5年ほど前に文部省在外研究員としてドイツに滞在した折、何回かライン川添いの田舎をドライブ旅行したのが病みつきとなった。今回の学会でも少し時間を割いて、ブリュッセルから足を延ばして、ベルギーからフランスとドイツの国境地帯まで、半日程度の小旅行を楽しんできた。概してヨーロッパの道は高速道路は勿論、一般道も空いていてドライブにストレスを感じることなく、のんびりとした牧歌的な景観を楽しむことができる。諸先生方の海外での楽しみ方といささか異なっているとは思うが、こういった楽しみ方もあるということであろう。



ブリュッセル近郊、有名な古戦場のあるワーテルロー郊外の風景

## 特別寄稿

## 第39回万国外科学会（ISS/SIC）に参加して

京都大学再生医科学研究所教授

井上 一知



万国外科学会は、多くの国際学会の中でも最も古い歴史を誇り、しかも外科関連の国際学会の中では、最も権威のある学会として高い評価を受けているが、今年はその100周年を記念する大会であり、その発祥の地であるベルギーのブリュッセルに戻って開催された。

開会式に引き続き行われたGrey Turner Memorial Lectureでは、慶應義塾大学の北島政樹教授がメインホールにおいて満員の聴衆を相手に、21世紀の外科学の将来を展望した熱意あふれる講演をされた。福澤諭吉によって設立された慶應大学の設立理念の紹介に始まり、外科学教室における臨床と研究の現況及び今後の方向性について、一目瞭然にわかりやすく工夫されたスライドを用いて、歯切れのよい迫力ある説明をされたが、臨床とBasic Scienceが見事なまでに調和した極めて格調の高い講演であり、強い感銘を受けた、会場の先生方もおそらく同じような感動を持って聴講されたことであろう。ちなみに本大会におけるこの記念講演会は1961年より毎回1名が選出されており、北島教授は第21人目の栄誉を受けられたことになり、日本人としては始めてのこの快挙に心から賛辞の意を表したい。

さて長い歴史を誇る伝統ある本学会も、一度日本で開催されたことがある。1977年に京都で開催されたのであるが（当時の日本医大斎藤 淳教授主催）、その後ずい分長い年月が経過している。発表演題数、参加者数等、本学会に対する日本の貢献度には圧倒的に大きいものがある。近い将来における日本への誘致をめざして本学会の理事及び会長を努められた出月康夫先生、現理事の比企能樹先生、日本支部長の山川達郎先生が、そして最近では日本支部Secretaryの北島政樹先生がそれぞれ一致協力して真剣な取り組みをされてきており、その御努力には頭の下がる思いがする。本学会開催国の決定に関しては不確定要素があるものの、少しでも早い時期における日本開催決定の朗報を一員として心待ちにするものである。さて、ベルギーは地ビールの種類が多く、しかもおいしくてビール党の私にとっては満足の至りであった。地域の名物料理であるムール貝のスープ煮込みに関しては、三浦病院院長の三浦健先生に美味しいレストランに連れていっていただき出月康夫先生ともども大変楽しい一時を過ごさせていただいた。出月先生はブリュッセルは30年ぶりだそうで、その時に味わったムール貝料理の味が忘れられないとの強い思い入れを抱いておられたが、三浦先生のおかげでまさしく30年前の感触がよみがえったと大変感激しておられた。パーティー会場では、私のテニス部の後輩で東大外科に入局し現在埼玉県立がんセンター外科で活躍している田中洋一先生に、日本では会わないのにベルギーの地で30年振りに再会した。大学時代に共によく遊んだ、さわやかでいい意味での男らしい好青年であったが、当時の私のファミリアクーベの車の番号をしっかりと覚えていてくれたのには感激した。その時に事務局の村田宣夫先生にも御会いし、日本支部のニュースレターへの寄稿の催促をいただいた。忘れていた事を思い出し一瞬酔いが覚めかけたが、村田先生の事務局としての御苦労や暖かい御心遣いをお察し、帰国してから何とかタイムリミットまでに書いてしまおうと気合いを入れた。

この原稿を書き始めたまさにその日に、どんでもない大事件が発生した。米国の象徴である世界貿易センターツインタワーへの二機の航空機突入による完全崩壊、米国の中核であるペンタゴンへの航空機突入など、米国民が建国以来かつて経験したことの無いよう、しかも世界を震撼させる同時多発テロが勃発した。米国はただちにテロリズムへの対決姿勢を鮮明にし、全面戦争の開始がすでに秒読みの段階に入りつつある。今回の万国外科学会が開催されたベルギーのブリュッセルにはまさしく渦中のNATOの本部があり、現在その緊張度が極度に高まっている。神戸の大震災（これは天災であるが）といい、世の中というのはいつ何が起きても決して不思議ではない。とにかく、少しでも世の中に貢献できるように日々邁進するのみである。

さて国際学会の意義であるが、なんといっても若い外科医にとって自分を発信する貴重な機会となり得ることであろう。国際語である英語でプレゼンテーションを行い、英語で討論に加わることになるが、発表内容が少しでも理解された時の喜び、相手の意図を少しでも理解し、こちらの返答が少しでも相手に通じた時の喜び、これはなにもものにかえがたい貴重な体験であり、次の飛躍への大きな糧になる。また世界をリードする外科のリーダーの先生方や、同じ専門分野の海外の外科の先生方と自由に討論できること、またその後にもいろいろな形で交流が可能のこと、これも若い外科医にとって大きな宝となろう。最新の情報を獲得することも大切であるが、世界の最先端の刺激を受け、勇気づけられ、新たな目標を持って日常診療や研究に立ち向かうことができる、まさしくそこに大きな意義があろう。

この伝統ある学会に若い先生方が多数入会され、世界に目を向けての積極的な自己発信、及び海外の外科の先生方との積極的な交流をされていかれますように熱望いたします。



